

徒手体操についてⅢ

体操の実践を規定する要因

(体操に対する態度を中心に)

池 田 隆 二*

Factors Prescribing the Practice of Gymnastic Exercises

—Chiefly on the Attitude to Gymnastic Exercises—

Ryuji IKEDA*

(Received September 1, 1969)

In order to find a clue to accept Gymnastic Exercises as part of one's daily life, this essay aims at the analyses of the relations between attitude and practice, and those of the relations between attitude and some other factors.

The attitude to Gymnastic Exercises is thought to be one of important, prescribing factors in the practice of Gymnastic Exercises.

Up to now we have never had any preceeding studies which are directly connected with the aim of this essay.

As the result of some analyses, following facts are made clear:

1) Gymnastic Exercises are generally accepted with favour and the attitude to Gymnastic Exercises are greatly connected with the practice of Gymnastic Exercises and the extent of one's fondness of sports.

2) As the factors prescribing the practice of Gymnastic Exercises, three factors are pointed out:

- a) the extent of one's fondness of sports,
- b) the practice of sports,
- c) the experiences in athletic club activities.

I 調査の目的

いうまでもなく、運動は健康の維持増進のために欠かすことのできないものであるが、種々の運動の中で、体操**はもっとも手軽にできる運動である。その意味では、体操が人々の生活の中に定着することが望ましい。

事実、ラジオ体操などは、古くから一部の人の生活の中に定着しており、最近ではまた、美容体操、テレビ体操、職場体操などがかなり普及しているようにみうけられる。

しかし一方では、体操は学校体育の全期間を通じて独立の教材として、あるいは他の教材の準備運動、補助運動として行なわれているにもかかわらず、それは体育の授業の時間に限られ、日常生活での実践にまでは発展しない傾向がみられるということもまた確かであろう。

ある人は体操を日常生活において実践し、ある人は実践しないという差異は、なぜ生まれるのであろうか。この素朴な疑問の追求は、体操の普及、発展のための方策を立てるに際しての重要な手がかりとなるであろう。

* 保健体育系列 (Department of Liberal Arts and Sciences—Health and Physical Education)

**小学校、中学校の新学習指導要領では「体操」に走、跳、投、捕、かけ足、および集団行動なども含くめた新しい概念が提示されているが、本研究でいう体操とは、ラジオ体操、テレビ体操、職場体操、美容体操など日常生活での健康法として行なわれている狭義の意味での体操を指す。

そこで本研究では、この疑問の追求の第一歩として、体操の実践の重要な規定要因であると思われる「体操に対する態度」に焦点を合わせ、態度と実践との関連、および態度以外の種々の規定要因との関連を分析することを目的とする。

従来、体操については、動きづくりとしての体操の運動内容の分析(山田¹⁾²⁾、板垣・松延³⁾⁴⁾⁵⁾⁶⁾、体操の効果(塩谷他⁷⁾、塩谷・桐生・藤江⁸⁾、山西⁹⁾、柳田¹⁰⁾)、体操と巧緻性との関連(柏原¹¹⁾、久保他¹²⁾)、体操の運動量(浜田・井上¹³⁾、浜田¹⁴⁾、柳川・浜田¹⁵⁾)、リズムの指導法(伊藤・見形¹⁶⁾)、新しい体操の創案(松延¹⁷⁾、中井他¹⁸⁾)、そして体操の史的、思想的考察(川島¹⁹⁾、木村²⁰⁾)、新しい体操概念の提案(浜田²¹⁾)など、かなりの数の研究がなされている。しかし、本研究の目的に直接関連する研究は皆無である。

Ⅱ 調査の方法

(1) 調査票の構成

最近の社会心理学的研究の方法にのっとれば、本研究では、まず、体操の実践(体操行動)を規定すると思われる仮説的要因を構造的に配置した理論図式を作成し、これを実際の調査によって修正していくというのが本筋である。しかし、すでに述べたように、この領域の先行研究は皆無であり、そのため、現在の段階でこのような理論図式を作成することは非常に困難であった。そこで本研究では、体操の実践や態度を規定すると思われる要因を構造化しないままに列挙して調査票に盛りこむことにした。その結果、調査項目は次のようになった。

1. 体操の実践の程度
2. 実践、非実践の理由
3. 体操の方法に関する知識の程度
4. 体操に対する態度
5. 学校の体操教育に対する興味
6. スポーツの好き嫌い
7. スポーツ実践の程度
8. 学校での運動部歴

ここにあげた要因はまさにア・プリオリなものであるが、本研究を通じて上記の諸要因をあるていど構造化させることができよう。したがって本研究は、体操に対する態度の構造についての理論図式を作成する前段階の研究として位置づけられる。

(2) 態度尺度の作成

上記4の体操に対する態度は、リッカート法による態度尺度を用いて測定することにした。そこで上記の調査項目と並べて体操に関する意見63個を、調査票に印刷した。各意見には、それぞれ「賛成」、「いちがいにいえない」、

「反対」の3反応形式の回答カテゴリーが付けられている。

表1 調査対象の内訳

		男	女	計
中 学 生	(1校)	54	59	113
高 校 生	(2校)	155	53	208
大 学 生	(4校)	113	35	148
一 般 社 会 人	1 0 代	2	9	11
	2 0 代	29	28	57
	3 0 代	9	8	17
	4 0 代	22	19	41
	5 0 代	8	2	10
	6 0 代	1	1	2
A 会 社 員		54	57	111
計		447	271	718

この調査票によって、1969年4月、表1に示す対象に調査を実施した。一般社会人には中部工業大学学生200人に調査票を自宅へ持ち帰らせ、父兄に記入してもらったものである。A会社員は、毎日職場体操を実施している会社のものである。高校生対象校男女各1校のうち、男子校は都心に所在し、体育施設に乏しい学校である。

回収した718通の調査票から360通を無作為に抽出し、各意見とも好意的反応に2点、非好意的反応に0点、「いちがいにいえない」に1点を付与して各人の得点を算出し、得点の上位25%(90名)と下位25%(90名)を抽出して項目分析を行なった。その結果1個の意見が削除された。また「いちがいにいえない」に33%以上の反応が集まった30個の意見は、態度測定のための意見としては不相当であるとして削除した。これによって31個の意見が削除され、残り32個の意見でリッカート尺度を構成することができた(信頼性係数0.984)。

Ⅲ 調査の結果

A 体操に対する態度、知識、実践

(1) 体操に対する態度尺度の内容

項目分析の結果、残った32の意見内容は表2のとおりである。右欄の数字は、調査対象718人の反応のパーセンテージである。この32個の意見について各人の得点を採点し直し、これをもって態度スコアとした。

各意見項目に対する反応で、グループ間で顕著な差のある意見内容については表3、表4、表5、に示すとおりである。

表3の「体操をするくらいなら寝ていた方がましだ」については、高校生、一般社会人は、そうではないとする者が過半数を割っている。

表4「体操はからだを動かす楽しさをあたえてくれる」に賛成するむきは、むしろ一般人にみられ、生徒、

表2 体操に対する態度尺度の内容

ア	イ	エ	ム	好意的 反応	?	非好意的 反応
1. 体操は若さを保つ				67	28	5
2. 体操は健康・安全への態度の進歩には貢献しない				56	36	8
3. 体操は気分転換に役立たない				58	30	12
4. 体操は人に強いられなければならない気がしない				43	39	18
5. 体操はかたくなるしい				42	39	19
6. 体操をするとからだが柔軟になる				79	17	4
7. 体操は中年の人には健康を保つ良業である				69	27	4
8. 体操を日常生活に取り入れることは健康を保ち、明るい暮らしの役に立つ				64	32	4
9. 体操になじめない				39	37	24
10. 体操をしなくとも栄養を十分にとればからだによい				58	34	8
11. 体操は文明社会に欠かすことができないものである				51	42	7
12. 体操はからだを動かす楽しさをあたえてくれる				51	36	13
13. 体操は全身の緊張をゆるめるため効果がある				61	32	7
14. 体操はねむけをさます				60	30	10
15. 体操はにがてである				32	38	30
16. 体操はリズムカルな動きづくりによい				68	28	4
17. 朝の体操は1日を気持よくすごすのによい				57	36	7
18. 体操は日常の動作を軽快にする				60	34	6
19. 体操をするくらいなら寝ていた方がましだ				56	29	15
20. 体操は各種スポーツの前・後に欠かすことはできない				86	10	4
21. 何のために体操をするのかわからない				68	21	11
22. 体操は運動不足をおぎなう				79	16	5
23. 体操とは強制的にやらされるものである				61	29	10
24. 体操とは頭の疲れをとる				53	38	9
25. 体操はスポーツに必要な運動能力の修得に役立つ				67	27	6
26. 体操は誰かに号令をかけてもらうものだ				54	34	12
27. 体操は個人の体力に適した動きをえらぶことができる				67	27	6
28. 体操をすると食事がうまい				66	30	4
29. 体操は美容のためによい				64	31	5
30. 体操は生活のリズムをあたえてくれる				50	41	9
31. 体操は喜びよりも苦痛を感じさせる				42	42	16
32. 今までに体操の必要を感じたことはない				57	28	15

表3 体操をするくらいなら寝ていた方がましだ

	賛成	?	反対
中学生	13	24	63
高校生	26	27	47
大学生	12	27	61
一般社会人	20	34	46
A会社員	7	31	62

P<.01

表4 体操はからだを動かす楽しさをあたえてくれる

	賛成	?	反対
中学生	45	37	18
高校生	36	43	21
大学生	53	40	7
一般社会人	56	36	8
A会社員	65	26	9

P<.01

表5 体操は個人の体力に適した動きをえらぶことができる。

	賛成	?	反対
中学生	74	25	1
高校生	52	36	12
大学生	71	25	4
一般社会人	70	27	3
A会社員	68	21	11

P<.01

表6 体操に対する態度の平均値と標準偏差

	M	SD
中学生	48.3	9.6
高校生	43.6	10.2
大学生	48.3	9.8
一般社会人	46.8	9.9
A会社員	47.5	10.7
全体	46.8	10.0

n・s

特に高校生では、体操によってからだを動かす楽しさを感じている者は半数に達しない。これは学校体育における体操の指導に関する問題としてとりあげることができる。

表5「体操は個人の体力に適した動きをえらぶことができる」については、高校生に、体操実践に際して体力に適した動きを選ぶことができないと考える者が比較的多い。このように高校生と他のグループ間に生じた差については、次のように解釈できよう。すなわち高校生が体操に対する価値を認めながらも、体操のもつ特性に否定的であることは、おそらく前述のごとく下十分な体育環境におかれている生徒のもつ態度としてあらわれてい

るのであろう。

(2) 体操に対する態度

態度スコアの平均値と標準偏差は表6に示してある。スコアの巾は0～64点で、中間は32点であるので、どのグループも体操に対してかなり好意的であることがわかる。スポーツや学校の体育の授業に対する人々の態度が、一般にかなりある、あるいは非常に好意的であるということは、過去の諸研究*に一致してみられる傾向であるが、同様の傾向が体操に対する態度においてもみら

* 過去の諸研究については、小林篤(1969): 体育における社会的態度の研究史, 日本体育学会東海支部会第16回大会発表資料参照。

れるのである。

態度スコアの中では高校生のスコアが若干低い、他のグループとの間には有意差はない。高校生のスコアが低いのは、調査対象となったこの高校は運動場がなく、体育の授業は屋上でほとんど体操だけを行っており、生徒は体操に食傷しているためではないかと思われる。

さてここで、体操に対する態度と他の諸要因との関連を分析する都合上、態度スコアによって被調査者を分類しておこう。態度スコアが全体の平均値より $\frac{1}{2}$ 標準偏差以上大きい者を好意群、平均値の上下、 $\frac{1}{2}$ 標準偏差以内の者を中間群、平均値から $\frac{1}{2}$ 標準偏差以下のスコアの者を非好意群と名づけることにする。これによって分類すると、表6にみるように、全体の平均値は46.8点、標準偏差は10.0点であるので、64~52点が好意群、51~43点が中間群、42~0点が非好意群となる。各群に含まれる者の比率は表7のとおりである。

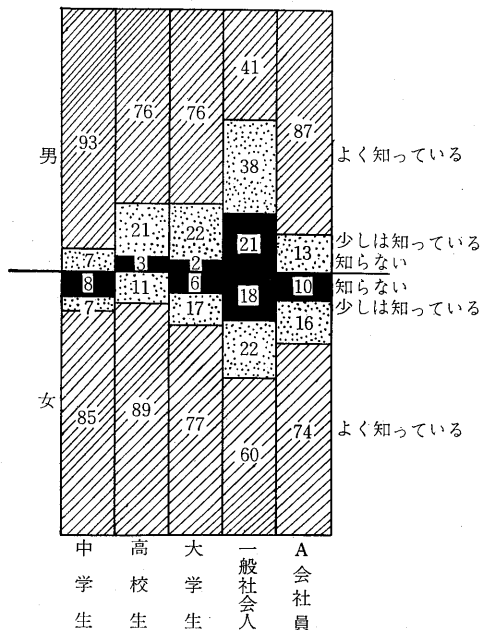
表7 態度スコアによる分数

	好意群	中間群	非好意群	計
中学生	41	32	27	100
高校生	30	35	35	100
大学生	41	31	28	100
一般社会人	39	29	32	100
A会社員	42	28	30	100

(3) 体操の方法に関する知識

ラジオ体操であれ職場体操であれ、あるいは運動部の準備体操であれ、ともあれ、なんらかの体操の方法を知

図1 体操の方法に関する知識の程度

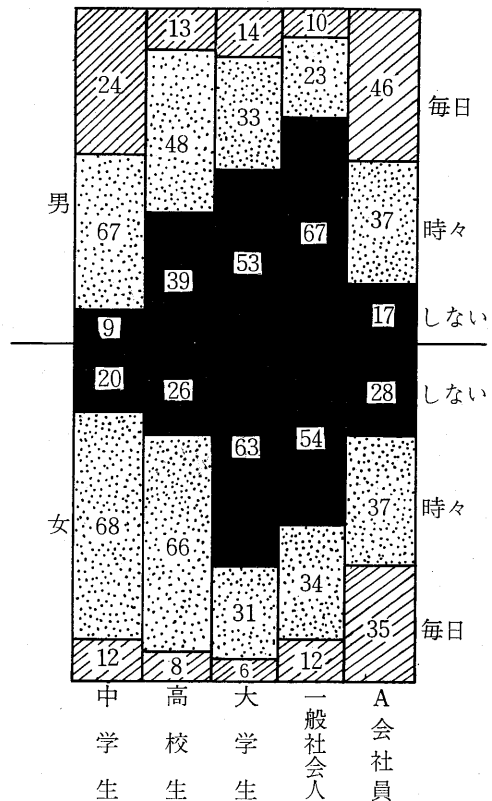


っているかを尋ねた結果が図1である。体操の方法は一般にかなり良く知られている。一般社会人ではさすがに体操の方法に関する知識の程度は低くなるが、それでも男性の41%、女性の60%がよく知っている。男性よりも女性の知識率が高いのは、おそらく、テレビなどマス・メディアの普及にともない女性向きの体操がどんどん家庭内に浸透していることによるのであろう。

(4) 体操の実践の程度と理由

図2は、実際に体操をどの程度やっているかを示したものである。学生、生徒の場合、学校の体育授業での体操も含まれる。

図2 体操の実践の程度



毎日職場で体操をやっているA会社は別にして、男性では中、高、大そして一般社会人となるにしたがって体操をまったくやらない人の比率が高まり、その比率は大学生段階ですでに50%をこえている。女性では、大学生になるとまったく体操をやらない人の比率が急激に高まるのが目立つが、一般社会人では大学生よりむしろ体操をやらない人の比率が減っている。Moore²²⁾をはじめとして Wessel・Richard²³⁾、小林・徳永・糸野²⁴⁾、徳永・佐久本²⁵⁾²⁶⁾などは、学生は一般にスポーツに対して非常に好意的であるにもかかわらず、実際のスポーツの

時間は、非常に少ないということを報告しているが、同様の傾向は、体操に対する態度と実践の間にも、社会人も含めて、見られるのである。

表8 体操を実践している人の理由(%)

	中学生		高校生		大学生		社会人		A会社員	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
スポーツの準備運動のため	76	71	67	77	47	15	4	3	9	2
気分を爽快にするため	31	15	39	20	58	8	57	58	56	44
疲れの予防回復のため	39	4	22	10	25	8	30	50	51	41
健康保持のため	24	25	22	10	32	8	61	58	49	41
やらされるからしかたなしに	31	25	27	26	13	38	9	6	27	22
規則正しい生活を送るため	10	8	12	3	28	0	26	19	20	7
労働力をつけるため	8	2	4	0	2	0	22	13	24	20
習慣になっているから	8	13	5	5	11	0	17	13	7	2
美容のため	0	2	3	5	0	8	0	16	9	17
その他	0	4	4	3	9	15	0	6	2	2
N	49	48	95	39	53	13	23	31	45	41

表8は体操を実践している人の理由である。30%以上の比率はゴチック体で示してある。

中学生高校生ではスポーツの準備運動のために体操を行なっている者が圧倒的に多い。これら、スポーツの準備運動のためと答えた者のうち、運動部所属者は中学生で83%、高校生で78%を占めている。体操がこのように、スポーツの付属物の位置にとどまる限り、スポーツをやらなくなれば、それに比例して体操もやらなくなるであろう。前掲の図2で、体操をまったくやらない者の比率が、大学生あたりから急激に高まるのはそのためであろう。体操がスポーツの準備運動という地位から脱却して、それ自体が目的として行なわれるようになるため

には、体操を行なう者の中に、体操に対する新たな目的意識が芽ばえなくてはならない。それは「気分をそう快にするため」、「疲れの予防、回復のため」あるいは「健康保持のため」というような目的意識である。体操を日常的に実践している社会人を支えるのが、このような目的意識であることは表にみるとおりである。なお大学生の女子では「やらされるからしかたなしに」が圧倒的に多い。

一方、体操をまったくやっていない人の理由は表9のとおりである。A会社は別にして、一般に「めんどうだ

表9 体操を実践していない人の理由(%)

	中学年		高校生		大学生		社会人		A会社	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
めんどうだから	40	36	63	57	50	50	40	28	7	3
暇がないから	40	45	30	64	27	50	38	42	6	25
必要を感じないから	20	9	25	14	30	24	19	6	0	6
楽しくないから	20	0	20	0	8	5	8	6	1	13
なじめないから	20	0	7	0	3	5	8	19	2	6
やり方をよく知らないから	0	18	8	0	10	0	8	6	0	0
その他	40	18	5	21	8	9	13	3	0	6
N	5	11	60	14	60	22	48	36	9	16

から」が圧倒的に多く「ヒマがないから」も多い。たとえばラジオ体操の所要時間が3分間であることを考えれば、「ヒマがないから」は口実にすぎないであろう。

(5) 態度、知識、実践の関連

体操に対する態度と体操の方法に関する知識との関連は図3のとおりである。全体としては体操の方法に関する知識が豊富な者ほど態度も好意的であり、その傾向は一般社会人において特に顕著である。

図3 態度 × 知識

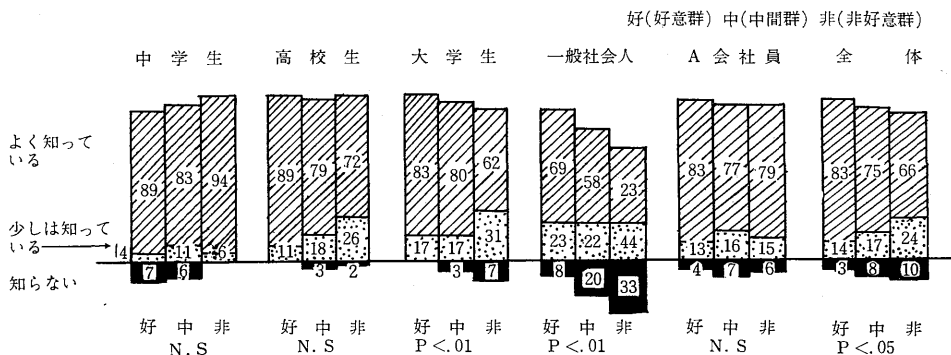


表10 知識×実践(%)

	中学生		高校生		大学生		社会人		A会社員		全男	全女
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
○●	24	12	10	8	14	5	7	10	41	28	61	
○■	65	64	38	62	29	23	13	24	31	32	38	
○▲	4	8	28	19	33	49	20	25	15	14	21	
□●	0	0	3	0	0	0	0	2	6	5	2	
□■	2	5	9	3	3	9	8	9	6	3	6	
□▲	5	3	9	8	19	9	28	12	1	7	10	
△●	0	0	0	0	0	0	2	0	2	0	0	
△■	0	0	0	0	0	0	2	2	0	2	1	
△▲	0	8	3	0	2	5	20	16	0	7	6	
計	100		100		100		100		100		100	
検定	*	*	—	—	*	—	*	—	—	—	*	
	*	*			*		*				*	
	* P<.05				* P<.01							

知識
○□△
良少
くし
知は
な
つ知
いて
いる

実践
●■▲
毎と
日し
きな
どい
き

表10は体操の方法に関する知識と体操の実践との関連を示したものである。30%以上の比率はゴシック体で示してある。中学生では、体操の方法をよく知り、ときどき実践している者がもっとも多いが、その比率は高校生、大学生と移るにしたがって次第に低下し、大学生では知ってはいるが実践しない者がもっとも多くなる。その傾向はとくに女子学生に著しい。一般社会人になると、男性では、体操の方法すらも忘れられていく傾向にあり、「少しは知っているが、実践しない」者がもっとも多くなる。これに対して女性では、一般的には男性と同様の傾向にあるが、しかし一方では、体操を実践する者が女子学生よりふえていることが注目される。全体的には、知識と実践との間には弱い関連が認められる。

図4は体操に対する態度と体操の実践の程度との関連である。中学生を除いて、好意群から中間群、非好意群と移るにつれて、体操をしない者の比率が増し、態度と

実践との間には有意な関連がある。

以上の分析の結果、態度と知識、知識と実践の間には弱い関連が、態度と実践の間にはかなり強い関連が存在することが明らかになった。

B 体操に対する態度と諸要因との関連

(1) 態度と学校の体育授業での体操に対する興味との関連

学校の体育授業においては、種々の形で体操が行なわれている。学校の場での体操に対する興味は、体操に対する態度と有意な関連をもつにちがいない。事実、図5—(1)にみるとおり、高校生だけは若干趣がちがうが他はすべて態度と興味との間にあざやかな関連がある(社会人については、自己の学生、生徒時代を思い起してもらった)。しかしそれにしても、概して学校の体育授業での体操を「面白い」と感じている者の比率が低いことは注目される。

(2) 態度とスポーツの好き嫌いとの関連

スポーツの好き嫌いが、スポーツに対する態度や体育の授業に対する態度と有意な関連をもっていることは、すでに小林²⁷⁾²⁸⁾によって明らかにされているが、同様の結果が、図5—(2)にみるとおり、体操に対する態度とスポーツの好き嫌いとの間にも見出された。

(3) 態度とスポーツ実践との関連

すでに図4でみたように、体操に対する態度と体操の実践との間には有意な関連が存在する。では、体操に対する態度とスポーツの実践との関連はどうであろうか。図5—(3)にみるとおり、全体的には有意な関連はみられない。

図4 態度 × 実践

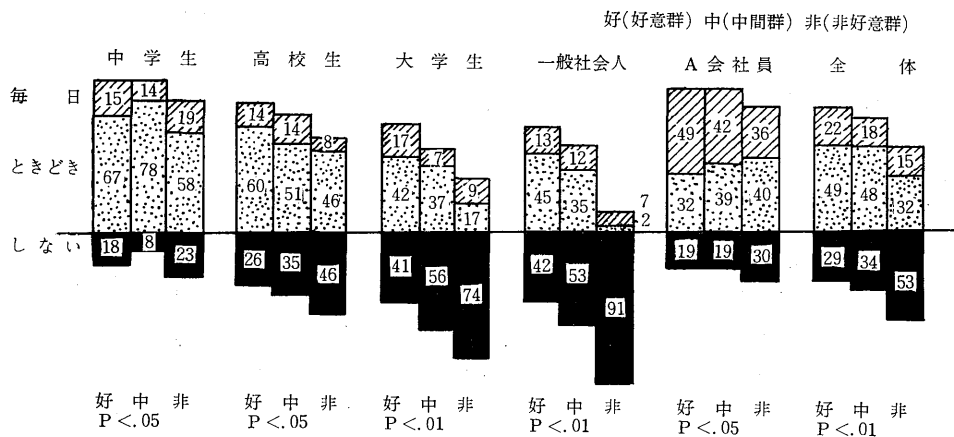
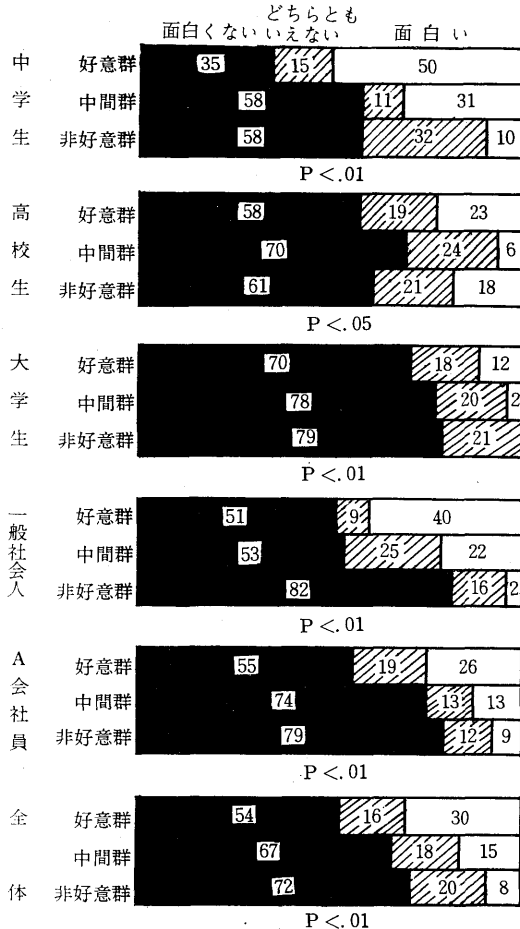
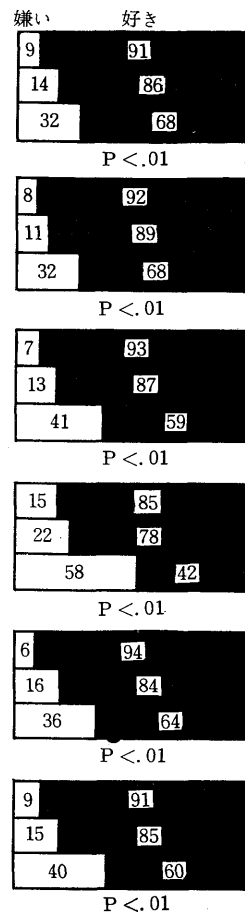


図5 体操に対する態度と諸要因との関連

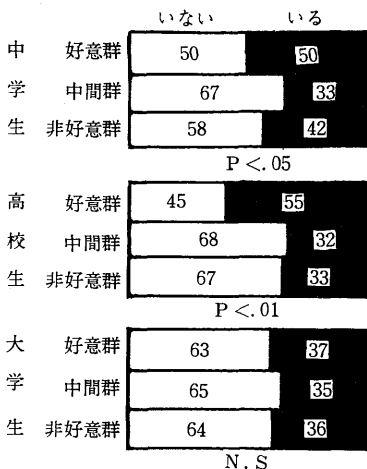
(1) 態度×興味



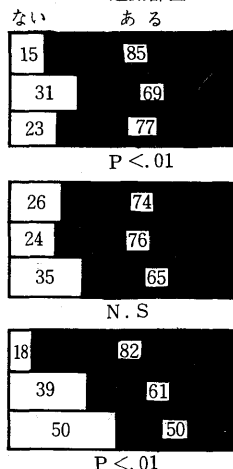
(2) 態度×スポーツの好き、嫌い



(3) 態度×スポーツ実践



(4) 態度×運動部歴

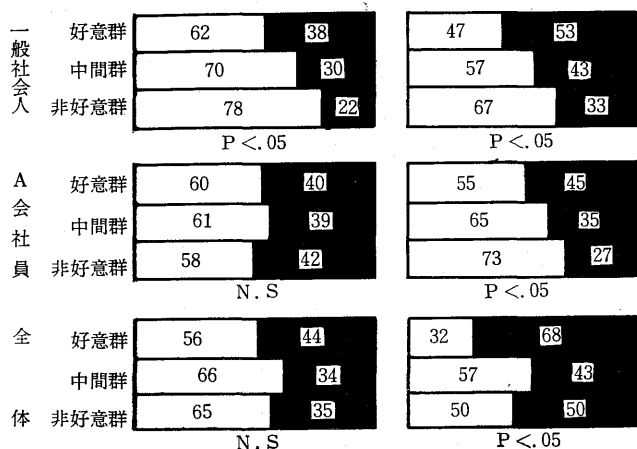


(4) 態度と運動部歴との関連

学生・生徒時代、運動部に所属している者の多くは、練習のたびごとに準備運動として体操をやっていたにちがいない。そのような実践の積み重ねは、おそらく、体操に対する好意的な態度を育てるであろう。図5—(4)にみるとおり、高校生を除いては有意な関連が認められる。

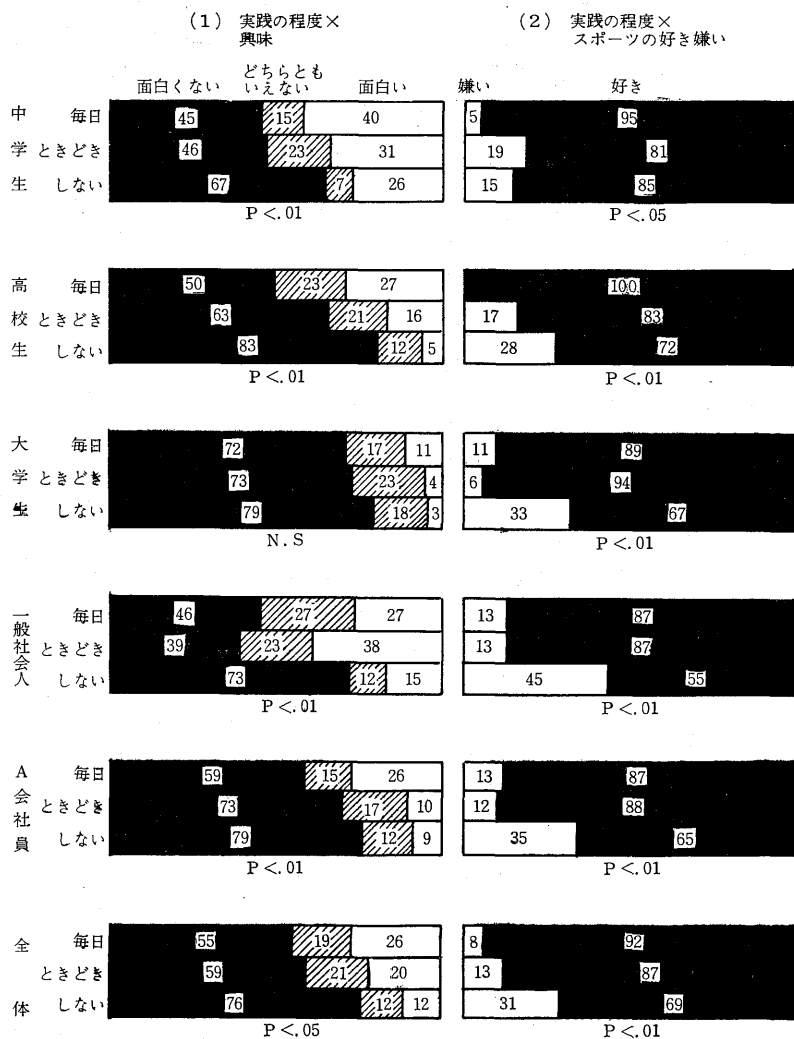
C 体操の実践と諸要因との関連

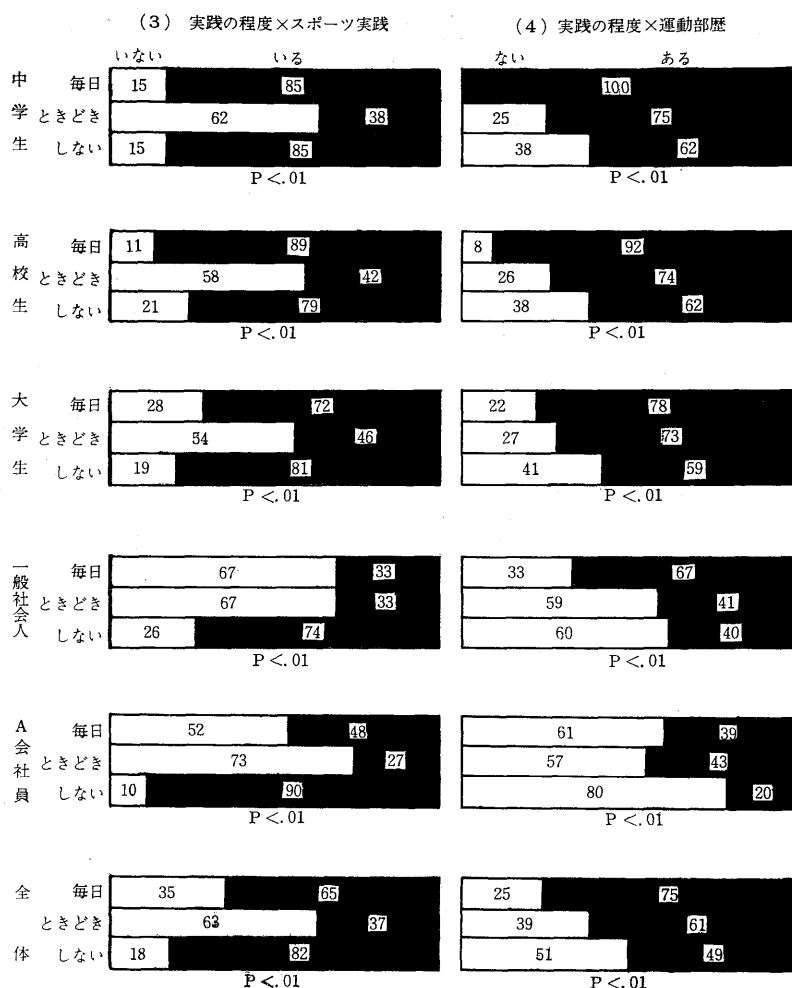
Bと同じ手法で、今度は体操の実践と諸要因との関連を分析してみよう。実践の程度と体操に対する興味、スポーツの好き嫌い、運動部歴とは、態度との関連の場合と同様、図6—(1), (2), (4)にみるとおり有意な関連がある。



ところで、図6—(3)、体操の実践とスポーツ実践との関連は、統計的には有意であるが、そのグラフの形は、他の場合とはかなり趣を異にしている。すなわち一般社会人を除いては、毎日体操をやっている人と、逆に全く体操をやらない人と、スポーツをやっている人が多く、ときどき体操をやっている人には、スポーツをやっていない人が多い。一方、社会人では、体操をやっている人には、スポーツをやっていない人が多く、体操を全くやっていない人にはスポーツをやっている人が多い。この現象については次のように解釈することができよう。すなわち、日常的に

図6 体操の実践と諸要因との関連





スポーツをやっている者はあまり体操には関心を示さず、日常、スポーツを行なう機会に乏しい者が体操に関心を示して、ときどき体操をやる傾向がみられる。ただし、学校の生徒で運動部に所属している者は、習慣として練習を始める前に体操を行なう傾向がある。学校の生徒で毎日体操をやっている者の中にスポーツをやっている者の比率が高いのはそのためであろう。しかし、そのような実践が、体操の必要感の認識にもとづいて展開されているのではないことは、スポーツをやっている人の中で毎日体操をやる人の比率が大学生あたりから低下しはじめ、社会人になると激減することからわかる。

D 体操の方法に関する知識と諸要因との関連

体操の方法に関する知識と興味、スポーツの好き嫌い、スポーツ実践および運動部歴との関連について、全

体の関連をみたのが図7である。体操の方法に関する知識で「知らない」とする者が少数のため「少しは知っている」者と総合して分析をすすめたが、全体としては有意差を見出すことはできなかった。

E 諸要因相互の関連

体操の実践の重要な規定要因であると思われる「体操に対する態度」を中心に態度以外の種々の規定要因との関連を分析してきた結果は表11に示すとおりである。これを図示したものが図8である。

体操の実践とスポーツの実践との関連は、一般社会人を除いては、直線回帰ではなく、曲線回帰の関係にあることは、すでに図6—(3)でみたとおりである。本稿のⅡ(1)で述べたように、本研究は、体操に対する実践と態度を規定する要因を構造化するための手がかりを得ること

図7 体操の方法に関する知識と諸要因との関連 (全体)

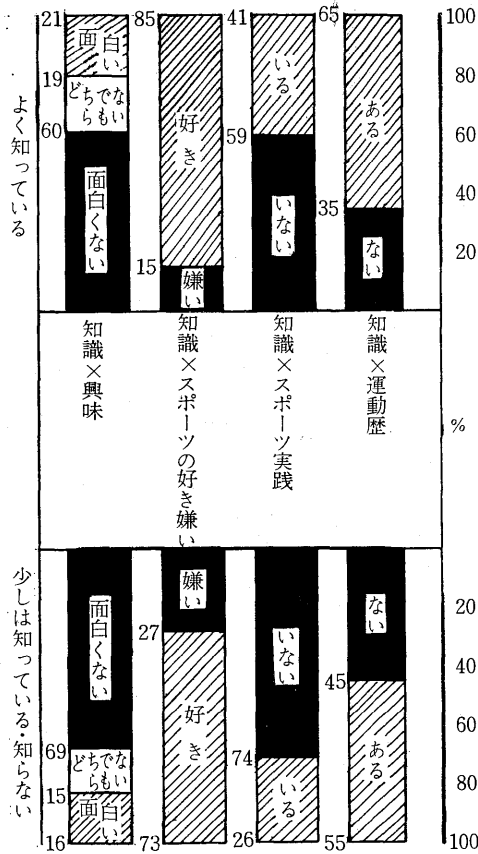
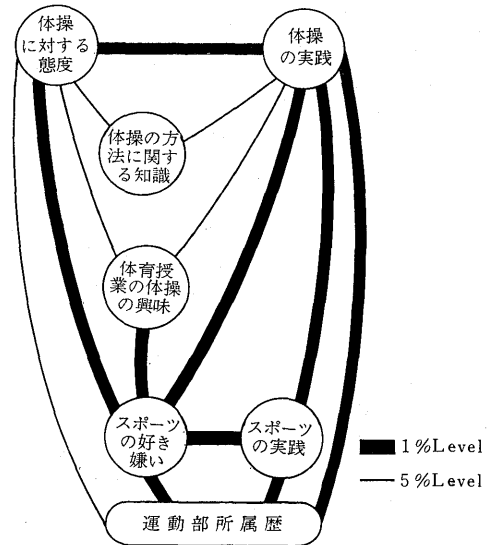


表11 諸要因相互の関連

	態 度	知 識	実 践	興 味	ス ポ ー ツ の 好 き 嫌 い	ス ポ ー ツ の 実 践	運 動 部 所 属 歴
体操に対する態度		*	**	*	**	—	*
体操の方法の知識			*	—	—	—	—
体操の実践				*	**	**	**
体育授業の体操への興味					**	—	—
スポーツの好き嫌い						**	**
スポーツの実践							**
運動部所属歴							

** 1% level * 5% level

図8 諸要因相互の関連



に、体系的な図式を作成していくことは今後の課題である。

IV 結 論

体操に対する態度はスポーツや、学校体育に対する態度にみられるように、一般にかなり好意的である。態度は実践と有意な関連があるが、しかしそれは、好意的な者は毎日体操をやる傾向があるということではなく、好意的な者はときどき体操をやり、非好意的な者は全くやらない傾向がみられるということである。スポーツの場合と同様、態度と行動との間には大きな落差がみられるのである。

体操とスポーツとが本質的にちがうのは、体操が人為的でしかも自覚運動であるのに対して、スポーツは自然発生的なものであり、したがって、スポーツは圧倒的に多数の人々によって好まれているのに反して、体操に興味を感じている人は非常に少ないということである。学校の体育授業では、種々の形で体操の指導をしており、子どもたちは主として体育の授業を通じて体操の方法を学ぶであろう。しかし体操に対する興味は育たず、体育の授業時間以外に自発的に体操を行なう者は数少ない。特に女子では大学生段階になると体操に対する興味は決定的に低下する。

一方、運動部では練習の前後に体操を行なうことが通例になっている。したがって、運動部に所属して活動する者がそうでない者より体操をより多く実践しているのは当然のことである。体操がスポーツの付属品として存在する限り、スポーツをやらなくなればなるほど体操を

が目的であった。その手がかりとなるのが図8である。体操の実践と体操に対する態度とは強い関連があり、両者は共に体操の方法に関する知識や、体育授業の体操への興味と関連をもち、また、スポーツの好き嫌いや運動部所属歴とも関連をもっている。この図を手がかり

やらなくなり、体操の生活化にますます断層が生じることになる。事実そのような人々の多くは上級学校に進学したり社会人になったりして運動部から離脱すると、とたんに体操を行なわなくなる。これらの人々は体操それ自体に喜びを見出していたのではなく、体操を単なる形式あるいは“儀式”として行なっていたにすぎないのである。だから、運動部の練習の時には形式どおり体操を行なう者でも、個人的にスポーツをやる際には準備運動として体操を行なう者はまことに数少ない。必ず体操をするのは水泳の前くらいのものであろう。

体操に興味をもたれていない以上、学校を卒業して社会人となった人々の多くは体操を全く行なわず、体操の方法をも次第に忘れていってしまうのも仕方のないことであろう。しかしここで注目すべきことは、一般的な傾向はこのようであるにしても、その中で具体的な目的意識をもち、体操を自発的に実践している人が、たとえわずかな比率であるにしても存在することである。そのような人々はとくに女性に多い。スポーツの機会に恵まれない人々が自分のからだに眼を向けるとき、はじめて体操が主体的な存在として登場するのである。しかもそこに登場するのは、学校で教わった体操ではなく、マス・メディアを通じて流される体操であると思われる。

体操に対する態度は、換言すれば体操に対する認識ということであろう。はじめに述べたように、認識と実践との間には有意な関連がある。しかし現状は、認識のレベルに比して実践のレベルは低く、かなりアンバランスである。体育は、認識と実践の統一の発展をめざす活動であり、体操もまたその例外ではない。認識と実践のアンバランスをなくするためには、学校体育の中で行なう体操のとりあつかい方の工夫と“動き”を中心とした体操の興味づけが課題となり、これらの追求が体操を単なる“儀式”としてとどめることなく、日常生活の中へ浸透させる重要な要因となることであろう。

人々が自発的に体操を生活の中にとり入れ、実践を通じて体操についての認識を高め、その認識がまた実践の質を高めるということが、体操の指導にたずさわる者の夢であろう。

したがって今後の研究の路線は、まず第1に、図8を手がかりにして態度と実践の体系的な構造図式を作成すること、そしてそれにもとづいて第2に、体操の生活化のためのもっとも効果的な指導法を実証的に明らかにしていくことであると考えられる。

〔付記〕

この調査、研究を進めるにあたり、名古屋大学小林篤助教授に終始ご指導を賜った。また調査に際しては愛知工業大学神代古典講師にご協力をいただいた。ここに

誌上を借りて心から謝意を表します。

文 献

- 1) 山田彰 (1963): 徒手体操の動きについて (そのⅠ), 体研8—1, 171。
- 2) 山田彰 (1964): 徒手体操の動きについて (そのⅡ), 体研9—1, 283。
- 3) 板垣了平・松延博 (1964): 徒手体操の動きについて, 体研9—1, 282。
- 4) 板垣了平・松延博 (1966): 徒手体操の動きについて (第2報), 体研10—2, 243。
- 5) 板垣了平・松延博 (1967): 徒手体操の動きについて (第3報), 体研11—5, 234。
- 6) 板垣了平・松延博・泰地昭子 (1968): 徒手体操の動きについて, 体研12—5, 90。
- 7) 塩谷宗雄・他 (1963): 職場における体操並びに軽スポーツ実施の所感調査・職場における軽スポーツ、体操の実施とその影響について, 体研8—1, 334, 335。
- 8) 塩谷宗雄・桐生武夫・藤江学 (1967): 職場における体操並びに軽スポーツが健康におよぼす影響について (第1報)。職場における体操並びに軽スポーツが体力におよぼす影響について (第1報)。職場における体操並びに軽スポーツが精神健康度におよぼす影響について, 体研11—5, 256・257。
- 9) 山西長太郎 (1964): 職場における体操実践の報告と考察, 体研9—1, 344。
- 10) 柳田利昭 (1965): 体量配分測定による体運動偏り習性矯正法の研究—全体体操について—, 体研10—1, 191。
- 11) 柏原幸生 (1967): 作業検査と徒手体操に於ける巧緻性についての考察, 体研11—5, 89。
- 12) 久保隆彦・他 (1967): 徒手体操とトランポリンを中心とした巧緻性についての考察, 体研11—5, 86。
- 13) 浜田靖一・井上俊孝 (1962): 徒手体操に於ける運動量の序列, 体研7—1, 214。
- 14) 浜田靖一 (1963): 体操動作の筋電図及びレントゲン撮影による研究, 体研8—1, 313。
- 15) 柳川英磨・浜田靖一 (1965): 体操の筋電図的研究, 体研10—1, 181。
- 16) 伊藤延世・見形道夫 (1968): 徒手体操におけるリズムの段階的指導法, 体研12—5, 91。
- 17) 松延博 (1964): 職場における疲労回復体操, 体研9—1, 359。
- 18) 中井忠男・他 (1965): 軽体操に関する研究, 体研10—1, 299。
- 19) 川島恒吉 (1964): 日本に於ける体操の変遷, 体研9—1, 220。
- 20) 木村吉次 (1965): 元老院会議号外第27意見書について—兵式体操の1断面—, 体研10—1, 55。
- 21) 浜田靖一 (1968): 徒手体操の形式性と自然性に就ての考察, 体研12—5, 163。
- 22) Moore, B.Y. (1941): The attitude of college women toward physical activity as a means of recreation, Res. Quart., 12, 720-725.
- 23) Wessel, J.A. & Richard, N. (1964): Relationship between strength and attitudes toward physical education activity among college women, Res. Quart., 35, 562-569.

- 24) 小林篤・徳永幹雄・桑野豊 (1967): 大学の保健体育科目に対する学生の態度構造に関する研究, 九州大学体育学研究 3-5。
(抄録は体研11-5, 82)。
- 25) 徳永幹雄・佐久本稔 (1967) 学生の生活と体育, スポーツ活動の実態, 九州地区体育社会学研究会。
- 26) 徳永幹雄・佐久本稔 (1968): 大学における体育, スポーツの社会学的研究一とくに学生の体育, スポーツに対する態度について, 体研12-5, 32。
- 27) 小林篤 (1968): 大学の保健体育科目に対する学生の態度構造に関する研究Ⅱ, 名古屋大学教養部紀要, 12, 87~105。(抄録は体研12-5, 247・248)
- 28) Kobayashi, A. (1968): Structure of Factors determining the attitudes of college students toward required health and physical education, Res. J. of Phy. Educ., 12-3, 147-156.